

松沢研究奨励賞受賞者 研究報告

願いの実現に向かい、豊かな自分を創る子どもの育成を目指して

— 6年生「まちの運動コースで地域を元気にしよう！」の実践事例を通して—

横浜国立大学教育人間科学部学校教育課程 H19年3月卒

横浜市立大岡小学校 教諭 紺野 達也



1 大岡で育つ子ども

ぼくは今年の目標ができました。それは「弘明寺を明るくする」ことです。今の弘明寺はコロナで暗くなっています。それを明るくするには、大変なことや問題があると思います。けれど、達成すれば、ぼくらはまちの状態をもどす、もしくはそれ以上にすることができるということです。実行するのは大岡小の最年長のぼくたちです。明るい弘明寺の未来を現実にするのは、ぼくらです。

これは、6年生になって最初の大岡の時間（生活科・総合的な学習の時間）での、ある子どもの振り返りである。自分もコロナによる不安の渦中にいるにもかかわらず、地域を明るくしたいという強い決意に溢れている。

大岡小学校では、このように「願い」を語る子どもの姿をよく見ることがある。いったいなぜ、このような子どもが育つのだろうか。

2 子ども中心の教育

大岡小学校は、「ともに学びをきりひらいていく子どもの育成」を教育目標に掲げ、子ども中心の教育を目指している。子どもが「もっと～してみたい」「～を実現したい」「～のようになりたい」といった願いをもち、その実現に向けて身の回りの多様な「ひと」「もの」「こと」と関わって、具体的な体験を通して学ぶ教育活動を展開している。そのような本物の学びは地域へ広がり、地域の人との密な関わりが生まれる。こうして、子どもにとって地域や地域の人が大切な存在になっていく。そして、学びの充実感や成し遂げた達成感を原動力として、また次の学びに向かっていく。上述した、

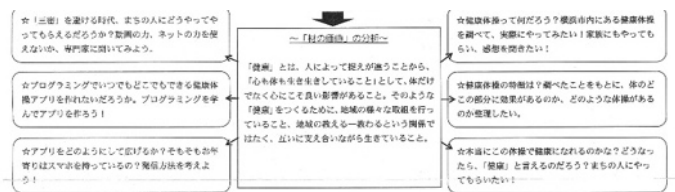
地域の明るい未来を願う子どもの姿は、まさに子どもの「願い」を中心に置いた大岡の研究の積み重ねによって生み出されたといっていよい。

このような考えのもと、本校では生活科・総合的な学習の時間を中核とした研究活動を行っている。令和2年度は、研究主題を「願いの実現に向かい、豊かな自分を創る子ども」と設定した。子どもの「願い」を中心に展開する単元づくりのポイントを、私の令和2年度の6年生の実践をもとに述べる。

3 単元づくりのポイント

(1) 単元づくりシートを活用して構想を練る

単元を構想するにあたって、本校では「単元づくりシート」を活用している。「子どもの実態」「教師の願い」「材の特性」の3つの視点から単元が成立するか分析する。そして、単元が教師主体の展開ではなく、子どもにとっての学びのストーリーになるように構想する。



▲令和2年度の本単元の単元づくりシート（一部抜粋）

(2) 実社会との関わりから「願い」を高める

「地域を明るくしたい」という漠然とした思いを、より明確な「願い」や「目標」に高めていくことが重要である。そこで、①区役所が毎年まとめる統計資料を用いて、学区のある地域が、市内で最も高齢化率が高いことや独居高齢者が増えている事実を捉えた。そこから、②高齢者の方へのインタビュー活動を行い、心身の健康の保持が喫緊の課題であることをつかむことができた。地域の高齢者の方々の運動不足やさみしさを解消したいという明確な願いが生まれ、そのために地域内をめぐる運動コースをつくるという、より具体的な目標を設定することができた。

(3) 多様な他者との対話によって価値に迫る

運動コースが完成したところで、横浜市全域に緊急事態宣言が出され、計画していた運動イベントを中止すべきか、悩む子どもの姿が見られた。私はこの問いに向き合い、自分たちの行動を決定していくことは、地域の人々の心身の健康を守る活動のあり方について真剣に考えることにつながるのではないかと考えた。そこで、日本スポーツ協会発出の「スポーツイベントの再開に向けた感染拡大予防ガイドライン」を子どもが熟読する機会を設けたり、多様な専門家との意見交換の場を取り入れたりして、意思決定できるようにした。

専門家とのオンラインでの合同会議には、横浜国立大学のM教授、横浜市スポーツ協会のKさん、区の地域振興課のMさんをお招きした。会議では、「地域で運動イベントを開いてもよいのですか。」という子どもの質問に、M教授はこう答えてくださった。「私たちにもはっきりとよいとか悪いとか、言えません。今まさに、世の中の大人たちでさえ答えを出せない問題だからです。みなさんで納得のいくまで話し合っただけで答えを出すべきだと思います。私たちは、みなさんを応援します。」

子どもは、熱心に何度も話し合い、「リスクを恐れて目標を諦めるのではなく、できることに徹底的に取り組んでいくことが、本当にやるべきことではないか」と考えをまとめていった。

そして、3月になったらイベントを開くことを決め、それまでに安全対策、感染症対策を徹底して講じていくという結論を導き出したのである。

緊急事態宣言が解除された3月のよく晴れた日、地域の方を招いての運動イベントを行った。地域の方々が口々に「楽しかったよ。」「元気が出た。またやりたいな。」「ありがとう。」と温かい言葉を子どもたちにかけてくださった。子どもたちも大満足の表情だったのが、忘れられない。

ある子どもは、この活動に前後して次のような作文を綴った。

地域には、コロナが広がり外出ができなくなり、運動不足、コミュニケーション不足になる人が多くいた。怖い気持ちや不安な気持ちになるという人も多かった。自分自身も同じだった。一人ひとりが健康になるために、地域の中を運動するコースを作った。私が感じているのは、コロナだからこそできることがあるということ。大岡の時間も地域の方の不安な気持ちを解消するために行っている。私もコロナへの恐怖心はものすごくある。けれど、今できることを成しとげていきたい。だから、私はコロナに負けない。

4 おわりに

大岡が実現を目指す子ども像は、自分の願いをもち、その実現に向けて仲間と共に本気で追究していく子どもである。本気の追究とは、目的の実現に向けて、解決が困難な課題にも真摯に向き合い、自分たちの活動に責任をもって最後までやり遂げようとする姿である。この子どもたちにとって、大岡小学校で学んだことは、きっとこれからの社会を力強く生き抜いていく力につながっていくに違いない。

私はこの実践を通して、何度も子どもの姿に心を揺さぶられた。これからも子どもに学び、共に歩いていく教師であり続けたい。